平成31年度入学者選抜学力検査問題

（後期日程）

小　論　文

〔人間社会学域
国際学類〕

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文8ページです。答案用紙は3枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入してください。

4　マス目のある下書き用紙の様式は25字×34行(850字)です。
答案用紙の1行あたり字数や総字数の指定とは異なる場合があるので，注意して利用してください。

5　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

問題訂正について

科目名　：　小論文（国際学類）

大問Ⅱ　p.8　注7

【誤】anthropolgy

【正】anthropology

I　アイルランドでは，日常的に話す言語が民族語のアイルランド語であったが，17世紀以降に，次第に英語に替わってしまう「言語交替」という現象が起こった。次の文章は，このアイルランドにおける「言語交替」について述べたものである。これを読んで，問1と問2に答えなさい。

アイルランドはなにか特別なことをしたために言語交替が起こったのではないということだ。その根底にあるのは，「順位づけ」というありふれた社会的行為である。結果的に言語交替を引き起こすことになった，アイルランドの母親の「わが子にはアイルランド語よりも英語を」という選択は，自分の方言よりも標準語のほうにわが子の将来をみる母親，「子どもには英語をしゃべらせたい」と願う日本の親と，なんら変わるところがない。そしてこのことは，言語もほかのさまざまな事物と同様に社会的な価値判断の対象になる以上，しごく自然なことである。アイルランドのばあいにはそこに植民地支配の過酷な背景があり，支配するものとされるものの力関係があり，貧困があった。そこにきて，大飢饉（ききん）によるアイルランド語話者の急速な減少も追い打ちをかけた。その頃にはしだいに親はわが子にアイルランド語を話さなくなり，あるいはわが子を積極的に英語の環境に置くようにしてバイリンガルに育て，子どものほうでも新しい言語である英語におのずと生きる手段を得ていたのであろう。

日本で近年盛んになっている，早期の英語教育導入の議論，国民が英語を話せるようにするための英語教育の議論は，空気のようにある日本語を前提としている。言い換えれば，その議論は，英語が日本に浸透して多くの国民が英語を日常的に話すバイリンガルになったあとのことまでは考えていない。現代は多様な言語文化をもつ人たちがそれぞれに，たとえば英語やスペイン語や中国語といった大言語をある文脈では利用しつつ，なおかつ自分たちの言語をもっているということが可能であり，インターネットを通して世界中いつでもどこでもつながる時代である。だからアイルランドに起こったような言語交替などは起こりにくい状況にある。コミュニティにおける同質性がかつてのようになく，民族言語的に多様であるために，あるひとつの方向に動くということが起こりにくい。そうでなくてもいまのところ，日本は人口が多く，世界経済的にも影響力のある国であるから，そう簡単に国の言

語が取り替えられるなどということは考えにくい。私自身もどこかで「日本語はだいじょうぶ」と，理由なき安心がある。

けれども，これからの日本のことばのことを議論するときに，私たちが知っておかなければならないのは，国民の多くが英語とのバイリンガルになったときには英語に傾くスピードが断然速くなるということである。もちろん，幸運にめぐまれて，安定的な二言語併用状態があるていど続くこともないとはいえないが，そのためには日本に複数言語使用の環境があり，英語と日本語がすくなくとも日本社会において，同じくらいの「力」をもっていることが条件となろう。もしも日本国民の大多数がひとまずなんらかの形で日本語と英語のバイリンガルであるという状況が生まれたときに，日本語はもはや安泰ではなくなる方向におおきく舵(かじ)をきっているかもしれない。

言語はコミュニティを単位としては三世代あれば替わることが可能である。そこにきてもし，最初には上からの「政策」としてなんとか苦労してであっても，日本全体に英語を浸透させ，英語が話せる国民を増やすということをしたとしよう。これはとてもたいへんなことだから一筋縄ではいかないが，一定の条件が整っていけばまるっきり不可能というわけでもない。その「作業」にしばらく(数百年，もしかしたら百年よりも短いかもしれないくらいの)時間がかかるとしても，日本語と英語のバイリンガル化が完了したつぎの世代には，世界の状況ないし日本を取り巻く環境によっては，英語の使用が増え，そのつぎの世代には英語のほうが日本語よりも楽，ということは可能性として起こりうるのだ。新しい言語がいちど多くの人の母語として定着してしまえば，気持ちがどうであれ言語能力と使用に引っ張られることは，アイルランドの多くの人々が民族語であるアイルランド語を話したいとつよく願っていても日常的には英語を用いて生活しているのをみれば明らかである。

ある日，車内広告に，某子ども英語塾のこんなキャッチコピーを見つけた。「お父さんお母さん。英語を日本語と同じくらい使えたらワクワクするよね。だっていろんな夢が選べると思うから！」(原文は「英語」を色を変えて表示)という女の子の吹き出し。そしてそのあとには，「お子さまの将来の可能性を広げませんか？」との問いかけが続く。英語にみる子どもの将来はアイルランドに重なる。たとえば150年前にアイルランドの南西部の地域では，アイルランド語よりも英語に子どもの将来を

託した。アイルランドは今年(2016年)3月イースター蜂起からちょうど百年を迎えたが，そのころの政治家たちの多くは古い貧しいアイルランドから脱却して，英語に豊かさを見て躍進しようとしていたのである。

そしてもうひとつ，この広告の女の子の「英語を日本語と同じくらい使えたら」という願望。早期の英語教育にある自然でイノセントな，バイリンガル化構想にも通ずる。そして，この女の子の願望は，いまの日本を生きるそう少なくない人々に共通のものとしてあるのだ。そして他方で，アイルランドは民族語を話せるバイリンガルを増やす計画のもとにあり，アイルランドの人々はアンケートに「アイルランド語が話せたら」「せめてアイルランド語とのバイリンガルでありたい」と民族語への思いを綴(つづ)る。なんだか，私たちがこれからひょっとすると登り始めることになるかもしれない山の反対側のふもとに，いまのアイルランドの人々の状況を見なくもない。言語交替を経験した国に生きる人々の言葉に，いま耳を傾けてみたい。

「ことばはそれを話す人なしに存在しえない」とアイルランドの人は言う。これはアイルランド語保持のスローガンにも聞こえるし，ゲールタハト注の先生たちがそう肝に銘じて国語の教育にあたるものでもある。そしてまた，私たちにあたりまえの事実をたしかめさせもする。言語は人があってこそのもの，人の生活があってこそのもので，言語が人に先んじてあるのではない。すなわち，何語を話すかはその人が決める，あるいは，その人がおのずと話しているものがそのときのことばなのであって，そのことに，その人以外はとやかく言う筋合いのものではない。

ことばを替えるということが集団的に起こったとき，それは言語交替になる。もともと話していたことばが民族語であって，国を単位として交替が起こったとき，後々の世代は民族語が失われたことを嘆く。あるいは，祖先のおかれた苦境と歴史を理解し，あきらめの気持ちをもって受容し，前に向かって進む。ある人においては，民族言語的同一性をもつ言語を話せないことが悲しみであり，ある人においては，国の繁栄のためには英語を得ていることは有利であると考えを整頓する，あるいは明晰(せき)にそう判断する。あえて言語への思いや考えを語るとなれば，現代を生きるアイルランドの多くの人は，民族語を失うことへの悲しみ，アイルランド語保持への共鳴を口にする。いまの世代がその時代背景のもとに自分たちの話す言語に向

き合っているのだと思う。

言語の問題はその土地に暮らす人々の生活や将来，そしてそれが集積したところでの国の繁栄などと直接的に結びついているので，ごく表面的に「民族語を守ろう」というようなきれいごとを口にすることはできない。ことばが日々変わっていくのと同様に，ことばが「替わって」いくこともまた，自然なこととして受け入れなければならないのかもしれない。それでも，たとえば，アイルランド語の母語話者がいなくなるというときに感じる，虚無感はなんだろう。翻ってまた，仮に後世の日本の人たちが日本語を話さなくなるというときに心を襲う，「そんなのは嫌」という拒絶，「そんなことはあってはならない」と思う気持ちはなんであろうか。言語のもつ身体性であろうか。ことばが人の感情や生活と密着しているために，言語が思考の手段であり形でもあり，自己表現や他者理解を全身で担うものだから，人はどうしても「民族のことば」にこだわるのだろうか。「私たち」として自分をつないでくれるものからはぐれることへの，薄いながらもベールのように覆う，微(かす)かでいて確実な不安感なのだろうか。あるいは，もっと本能的な帰属欲求なのであろうか。それとも，社会的な連帯意識に帰結するようななにかであろうか。

人の移動距離が増し，インターネットの普及した，現代のグローバル時代にあって，国や民族を超えて，共通のことばで意思疎通をはかれることは素晴らしいことである。そのなかで多くの民族語ないし小さな現地語が消滅の危機にさらされていることも事実である。またその一方で，英語のほうではインドやシンガポールにみるように現地化して，土地の文化(の一部)を反映した言語が生まれているのも事実である。World Englishes と英語を複数形にして，それぞれの地域文化に根づいた英語の研究の裾野も広がりをみせるのが現代である。世界の英語は多様性を増すが，グローバル化した状況にある人々の接触は，それぞれの土地に腰を下ろした英語が土着化してお互いの意思疎通がはかれなくなるほどに個別の方向に向かうことをさせない(古い時代ならば，とても長い目で見て，もしかしたら新たな個別言語に発展する可能性もあったかもしれない)。

このような現代においては，「言語」を単位としての多様性はたしかに縮小しているのかもしれない。けれども，と明るい方向にものを考えたくもなる(そもそも，多様なことが絶対的な善であるのかどうかはいったん考えないことにして)。人々の接触は

かつてないほどに多様化し，それがゆえに言語のありかたも多様化している。さらに，「変種」という単位でものを見れば，多様性の縮小もそう嘆かわしい事態になっているわけでもないのかもしれない。現代の世界を見渡せば，言語のもつ安定性，定着性がゆさぶられ，あるいは言語は土地や国家や，ときに民族から切り離され，一言語としての枠に収まらない流動性のなかにあるのが日々の言語の営みなのかもしれないと思うところもある。

ことばは変わっていくのが常態である。そして，ひとはそのときどきにおいて最良ないし唯一の選択，自然な選択をしているにちがいない。

（出典：嶋田珠巳『英語という選択―アイルランドの今』岩波書店，2016 年，192～198 ページ，一部改変の上引用）

注　ゲールタハト　アイルランドにおいて，アイルランド語を公用語とする地域を指す。

問 1　本文の内容を 280 字以上 300 字以内で要約しなさい。

問 2　あなたは，将来日本において英語が日本語との関係でどのように使われていくと思いますか。本文で論じられているアイルランドの状況と比較したうえで，800 字以内で自分の見解を具体的に述べなさい。

II アメリカ合衆国の研究者が書いた次の文章を読み，文章の内容を 900 字以内の日本語で要約しなさい。

Biological "sex"— by which we mean the chromosomal注1, chemical, anatomical注2 apparatuses注3 that make us either male or female — leads inevitably to "gender," by which we mean the cultural and social meanings, experiences, and institutional structures that are defined as appropriate for those males and females. "Sex" is male and female; "gender" refers to cultural definitions of masculinity and femininity — the meanings of maleness or femaleness.

Biological models of sex difference occupy the "nature" side of the age-old question about whether it is nature or nurture注4 that determines our personalities. Of course, most sensible people recognize that both nature *and* nurture are necessary for gender development. Our biological sex provides the raw material for our development — and all that evolution, different chromosomes注5, and hormones have to have some effect on who we are and who we become.

But biological sex varies very little, and yet the cultural definitions of gender vary enormously. And it has been the task of the social and behavioral sciences注6 to explore the variations in definitions of gender. Launched originally as critiques of biological universalism, the social and behavioral sciences — anthropology注7, history, psychology, sociology — have all had an important role to play in our understanding of gender.

What they suggest is that what it means to be a man or a woman will vary in four significant ways. First, the meanings of gender vary from one society to another. What it means to be a man or a woman among aboriginal注8 peoples in the Australian outback注9 or in the Yukon territories注10 is probably very different from what it means to be a man or a woman in Norway or Ireland. It has been the task of anthropologists to specify some of those differences, to explore the different meanings that gender has in different cultures. Some

cultures, like our own, encourage men to be calm and to prove their masculinity, and men in other cultures seem even more concerned with demonstrating extraordinary sexual ability than American men seem to be. Other cultures set down a more relaxed definition of masculinity, based on civic participation, emotional responsiveness, and the collective provision for the community's needs. Some cultures encourage women to be decisive and competitive; others insist that women are naturally passive, helpless, and dependent.

Second, the meanings of masculinity and femininity vary within any one culture over time. What it meant to be a man or a woman in seventeenth-century France is probably very different from what it might mean today. My own research has suggested that the meanings of manhood have changed dramatically from the founding of America in 1776 to the present.

Third, the meaning of masculinity and femininity will change as any individual person grows. Following Freudian注11 ideas that individuals face different developmental tasks as they grow and develop, psychologists have examined the ways in which the meanings of masculinity and femininity change over the course of a person's life. The issues confronting a man about proving himself, feeling successful, and the social institutions in which he will attempt to enact those experiences will change, as will the meanings of femininity for prepubescent注12 women, women in child-bearing years, and post-menopausal注13 women, or for women entering the labor market and those retiring from it.

Finally, the meanings of gender will vary *among* different groups of women and men within any particular culture at any particular time. Simply put, not all American men and women are the same. Our experiences are also structured by class, race, ethnicity, age, sexuality, and region of the country. Each of these focuses modifies the others. Just because we make gender visible, it doesn't mean that we make these other organizing principles of social life invisible. Imagine, for example, an older, black, gay man in Chicago and a young, white, heterosexual注14 farm boy in Iowa. Wouldn't they have different definitions of masculinity? Or imagine a twenty-two-year-old heterosexual poor Asian American

woman in San Francisco and a wealthy white Irish Catholic lesbian in Boston. Wouldn't their ideas about what it means to be a woman be somewhat different? One of the important elements of a sociological approach is to explore the differences *among* men and *among* women, since, as it turns out, these are often more influential than the differences between women and men.

If gender varies across cultures, over historical time, among men and women within any one culture, and over the life course, that means we really cannot speak of masculinity or femininity as though they were constant, universal essences, common to all women and to all men. Rather, gender is an ever-changing, variable collection of meanings and behaviors. In that sense, we must speak of *masculinities* and *femininities*, in recognition of the different definitions of masculinity and femininity that we construct. By pluralizing注15 the terms, we acknowledge that masculinity and femininity mean different things to different groups of people at different times.

(Extracted and adapted from *The Gendered Society Reader*, Sixth edition, Oxford University Press, 2017, xii-xiv)

注1 chromosomal 染色体の
注2 anatomical 身体構造上の
注3 apparatus 器官
注4 nurture 養育，育ち
注5 chromosome 染色体
注6 behavioral science 行動科学
注7 anthropolgy 人類学
注8 aboriginal 土着の，もとからの
注9 outback (主にオーストラリア)奥地
注10 Yukon territories ユーコン準州(カナダ北西部に位置する)
注11 Freudian フロイト(精神分析学者)の
注12 prepubescent 思春期前の
注13 post-menopausal 閉経後の
注14 heterosexual 異性愛の
注15 pluralize 複数にする

出典に関する補遺

平成 31 年度金沢大学個別学力検査（後期日程）「国際学類　小論文」の入学試験問題で引用した文章の出典は次のとおりです。

【設問Ⅱ（出典）】

Reprinted from "The Gendered Society Reader" by Michael Kimmeland and Amy Aronson, Oxford Publishing Limited. Copyright © 2016 Oxford University Press., as first published in Oxford Publishing Limited (Academic).com. All rights reserved. Distributed by Publishers' Licensing Services Limited, reproduced with permission of the Licensor through PLSclear.